信毎歌壇

米川 千嘉子 選

お湯に浸かり五歳の吾はさめざめと泣きし妹の産まれし夜に　（千曲市）中村　美樹

日本が支援せしガザの母子健康手帳使える平和は何時来るならむ　（佐久市）篠原　敬子

ときおりに歌のページを指で折る河野裕子の指思いつつ　（千曲市）関　津和子

幼児はペダルを踏めば何処までも行ける楽しさ知ってしまった　（池田町）西山　淑枝

哀しみの深きを聞けり言葉なくふたつの耳は唯そのために　（千曲市）倉石みつる

オンコードのベースの音を聴き分ける如く私の話をきいて　（松本市）みつ　たか

華やかな長持唄に送られて嫁入りて来しわれらの余生　（長野市）池田よし江

遠き日に子ら身につけしシャツ数多我にはどれも大きく着れず　（飯綱町）坂井　寿男

一人飲む三杯分の珈琲をスイッチオンして香り待つ朝　（長野市）宮崎　雄

物わかりよき八十代に突入し冬の風知草揺れ止まぬなり　（長野市）近藤　光子

佳作

雑貨店サザンの曲が流れれば老夫婦ついロずさんでる　（伊那市）赤羽　正彦

深山へキノコ採らむと鎌を持ち熊をおそれて鈴鳴らし入る　（上田市）甲田　隆登

選評　第一首、姉になるうれしさよりも、周囲の関心がすべて妹に行ってしまうのをつくづく感じた5歳の記憶が切ない。第二首、優れた日本の母子手帳のシステムがガザに広がっていた。誇らしいことだが、それは平和を前提に機能する。説得力ある歌。第三首、「俺の辞書をかってに折るな」と夫・永田和宏さんが詠んだのを踏まえる。下句巧みだ。第四首、幼児が広い世界に出ていってしまう寂しさ。

小池　光 選

いつまでも七十歳の亡き父はわが弟のやうな気がする　（飯綱町）坂井　寿男

ハムスター言葉なきもの哀れなりひっそり冷たく転がりていし　（千曲市）倉石みつる

一斉に飛び立つ雀ぶつかりはしないのだろうまれにあるかも　（佐久市）水間喜美子

ペットボトルのふた開けられぬ輪ゴム巻きやっとこ開いたどうにか開けた　（長野市）島田　怜子

散歩などした事の無き夫がする子夫を連れて日当る道を　（小海町）依田　久代

負けた数ならば負けない私にも秋の終わりの日差し明るし　（松本市）堀内　悠子

図書館の大きな窓の紅葉を見つめていると我は無になる　（松川村）岡　豊村

叔父さんの征きて還らぬニューギニア童顔のこる遺影に見入る　（小諸市）星野　直人

ミサイルの飛び交ふことをよそ事に紅葉の山にキノコをあさる　（上田市）甲田　隆登

施設より妻の近況知らされる添へられし写真の素顔変はらず　（御代田町）柳沢　光雄

佳作

向かい風強く吹く中一歩一歩家族四人で固まり歩く　（茅野市）三好　碧

トランプに負けて大泣きしたる子が私看護師めざすと話す　（松本市）田中しはす

選評　第一首、長生きしているといつしか死者の享年を超える。70歳で世を去った父の年齢を過ぎた。いつしか弟のような気がするという感慨が新鮮で、よい。第二首、これは飼っていたハムスターが死んだときの歌だろう。一言も言わずに黙って死んだ彼がかわいそうである。動物であれ人であれ、いのちはひとつ。第三首、絶対にぶつからない雀たち。結句がとぼけた感じがしておもしろい。

小島　なお 選

残されし寝巻に見たり収穫にとんで行ったよこんな感じで　（長野市）堀内　祐希

早朝に貝殻拾ひぬ早朝の貝殻はわが孤独をいやす　（長野市）水上　義昭

藁焼きの吾に近寄り囁きて煙に巻き往く散歩の友は　（上田市）山本　進

「痛くない？」何度も聞いて振り向きぬ母はオペ室に吸い込まれゆく　（群馬県昭和村）須藤　俊哉

同級会欠席すれば幹事さん二十歳の写真のコピー送りくれぬ　（伊那市）小坂　明子

僕はもうつかれたという四歳児ジイジも君と友達になる　（安曇野市）細川　恒

三十分待たせることが侮辱なら四十年は何というのか　（長野市）片山ゆかり

洗いたるテニスシューズを物干しの端に掛けたりまだ履くために　（長野市）河口　武矩

去年まで持ち上げられた重石ゆえ持ち上げられると思いしが否　（佐久市）荻原多美子

ものみなは眠りにつきて静かなりやがて霜置く広き野面に　（長野市）池田よし江

佳作

病室の窓越しに見る車みち車体高低、色のさまざま　（佐久市）篠原すずひ

重大な事故のおきたる交差点赤で塗られて忘られぬように　（山形村）上條ひろ子

選評　第一首、起き抜けに畑へ。脱いだままの形で残された寝巻が朝の時間を饒舌に伝えている。第二首、早朝の散歩での場面だろうか。リフレインが寄せては返す波と心の韻律に重なる。第三首、藁焼きの煙と友の言葉の煙。ふたつの煙に巻かれながら、不思議な余韻が漂う。第四首、小さな子どものように手術の痛みを怖がる母。扉の向こうへ吸われてゆく母との物理的、心理的な距離感覚が寂しい。